



【写真】  
 ①・④／被災直後の宮城県石巻市(木名瀬裕さん提供)  
 ②／福島県や北海道のNPO法人などがつくる「福島の子どもの笑顔と元気応援プログラム ふくしまキッズ夏季林間学校」の参加者が弟子屈町へ到着。(2011年8月)  
 ③／釧路市の市民団体「被災者支援ネットワーク釧路」を通じ、福島県や山形県、宮城県、千葉県などの親子が町内で一夏を過ごした。(2011年8月)

# 東日本大震災 あれから1年

2011年3月11日14時46分  
 太平洋三陸沖を震源として発生した巨大地震「東日本大震災」  
 国内観測史上最大となるマグニチュード9.0の地震は  
 東北・関東地方を中心に甚大な被害をもたらしました

あれから1年  
 被災した方  
 弟子屈から被災地を思う方  
 それぞれの思いを伺いました



## あの日から

2011年3月11日。

私たちが住んでいたところも、震度6弱という非常に大きな揺れが襲いました。そんな中、家族全員が無事だったことに、何より安心しました。

その後、地域の1人暮らしのお年寄りの家を回って安否の確認をしたり、停電などライフラインの停止、物流が途絶えたことなどによる食料や燃料の不足など大変な日々を過ごしましたが、生活がやや落ち着いてきたころに気になり出したのが、

## 不安の中で

福島第一原子力発電所の事故による放射能の影響でした。

昨年5月ごろ、娘たちの体調が悪くなりました。同時期、近所や下の娘が通う小学校でも、嘔吐や発熱、下痢、喉の痛みなどを訴える子が多数見られました。保健室には毎日のように、鼻血を出して駆け込んでくる子がいて、2〜3人のお母さん方や担任の先生も、何か変だねと話していました。これは放射能の影響ではな

## 食べ物が安心だというのが素晴らしい

いのかと思います、放射能に関する講演会などに参加して勉強を始めました。子どもたちの体調不良の原因は分かりませんが、放射能に対する不安は募っていました。

## そして北へ

毎年、子どもたちの夏休みに、東北の海へ行くのが恒例となっていたのですが、妻の提案もあり、昨夏は北海道へ行きました。8日間、道内を観光して、おいしいものを食べて…。気分的なものもあつたのでしょうか、子どもたちの体調が良くなっているのを感じました。岩手では、外で遊ぶと倦怠(けんたい)感を感じていた子どもたちが、北海道では外で思いっきり遊んでいて、それを見るのはとてもうれしいことでした。

## 今そしてこれから

また、行く前にインターネットで北海道の被災者支援策を調べたのですが、そのときに川湯ビレッジの池上さんと知り合いました。住む場所や仕事、たくさんの方などを紹介してくださり、それまで無意識のうちに考えていた北海道への移住の可能性が見えてきました。

## 決意の時

9月ごろ、元々が丈夫ではない妻が体調を崩しました。

今、日々を一生懸命に過ごしていますが、いつかこちらでも野菜を育てるなど、自分の手で食べ物を作るのが夢です。



●いしかわ なかる さん(写真右)

東日本大震災の被災を受け、2011年12月、妻・仁美さん(写真中央)と仁美さんの母(同左)、中学校2年、小学校2年の2人の娘さんとともに岩手県花巻市から弟子屈町に移住。岩手県中央部に位置する花巻市は、人口約10万2,000人。震災当日は震度6弱の揺れに見舞われ、一時は電気やガスが停止したほか、上下水道も一部損壊。公共交通も全面停止するなどして、約600人が避難所で過ごした。原発事故による影響としては、花巻市に隣接する奥州市をはじめ、県南の3市町が汚染状況重点調査地域となった。40歳。川湯在住。

# 被災地からの移住 石川 央 さん

## あの日のこと

2011年3月11日。  
テレビから流れる津波の映像を目にした僕は「ほうっておけない」とつぶやきながら、過去の震災復興支援活動の記憶をたどり、活動に必要な機材の準備を始めていました。そして、14日には弟子屈町を出発して、

## 突き動かすもの

以来、6回にわたって被災地を訪れ、日本全国、そして世界中から集まったボランティアとともに、さまざまな活動を行いました。

最初は物資を届け、道を開け、炊き出しを行い…。4月に入ってからは、がれきの撤去とヘドロのかき出し。その時々で必要なことを夢中で行ってきました。

僕を突き動かしているものは何だろう…。

がれきの山から人々が立ち上がろうとしている、立ち上がっていく。その元気の源となるのは、子どもたちの声でした。そして、前へ進もうとするお年寄りたちでした。子どもの元気やお年寄りの優しさに、僕たちボランティアも癒やされていた

ように思います。対して、大人はみんな葛藤していました。時間をかけなければならぬと

分かっていながらも、実際は気ばかり焦って、思うように進まない。そして、守らなければならぬ子どもたちやお年寄りが取りこぼされていくのではと感じました。

そういう方たちと一緒に「今をつくっていくこと」を手伝えたら…という思いが、僕を突き動かすように思います。

僕にできることは少ないけれど、常に勉強、創造して、できることを増やしていかなければならないと感じました。自分が、自分たちが…といった個人的なことではなく、みんなにとって、そして全体的に役立つことがとても大切なのだと学びました。

## 見えてきたこと

3月10日以前と3月11日以降では、僕の考え方もガラッと変わりました。

震災はどこでも起こり得ること。弟子屈の「今」も永遠ではないということ。人間は自然に勝てない。あらためて思いました。

## これからのこと

自分や家族のためだけではなく、もつと大きな意味で誰かのために何かをするということ。が、生き方として、暮らし方として、とても大事になると思います。人に必要とされている、いつかされるといふ揺るぎない部分が大事になっていく。僕自身が被災された方と関わる中で感じたというのももち

誰かのために何かをするということが、生き方として、暮らし方として、とても大事になる

# 震災復興ボランティア 木名瀬 裕 さん

## 子どもを守るため

震災があり、原発の事故がありました。これらは切り離して考えていかなければならないと思いました。「ことは違う」と。

僕は今、当初から行ってきた宮城県石巻市での復興支援活動に加え「ふくしま子ども元気村」というプロジェクトに携わっています。放射能の影響を心配する福島県内の親子に、県内でも比較的、空間線量が低い金山町で過ごしてもらおうというものです。

目にも見えない、匂いも味もない放射能の危険におびえ、子どもたちは外で遊ぶこともできず、親たちは心を痛めながらもそこから出られないという人もいます。福島から出る人、福島に残る

が、今後は北海道を中心に考えていくことになると思います。それは、いっどこで起こるか分からない災害について、北海道においても緊急事態に備えるということもありますし、何より、日本全国の子どものために、健康で幸せな未来のために、北海道での保養について道筋をつけたという希望があります。

復興支援には大きなこと、小さなこと、どちらも必要で、両方とも関わりがある。全部含めて、僕にとってもいい経験になりました。



### ●きなせ ひろし さん

屈斜路ガイドステーションわか代表  
阪神大震災・有珠山噴火時を経て、東日本大震災においても被災地で復興支援・救援活動に携わる。主に津波の被害の大きかった宮城県石巻市で活動。さらに、福島第一原子力発電所の事故による放射能を懸念する福島県の方に、県内でも比較的放射線量の低い金山町で過ごしてもらおうというプロジェクトにも関わる。  
2011年3月14日～31日、4月1日～15日、5月1日～17日、6月1日～12日、9月1日～13日、11月27日～12月10日と6回も被災地に赴き、2月23日から再び被災地へと向かった。  
42歳 札友内在住

### 木名瀬さんの活動に関するサイト

- ▶ 屈斜路ガイドステーションわか <http://www.wakka.biz/>
- ▶ ボランティア支援スペースKIZUNA絆(ふくしま子ども元気村) <http://www.ishinomakizuna.net/index.html>
- ▶ サンライス元気村プロジェクト [http://ishinomakizuna.net/project\\_sunrice.html](http://ishinomakizuna.net/project_sunrice.html)



牡鹿半島の小さな漁村で



全国から集まったボランティアが協力して



避難所で炊き出しのお手伝い



地盤沈下し水が引かない石巻市街地



昨年3月、最初に復興支援に向かったとき雪の中テント泊で被災地を目指す

※写真は全て木名瀬さん提供